ご近所のお医者さん

764

イワサキ眼科副院長 永井由巳さん ＝大阪市中央区

ゆがんで見えたら要注意

早めの受診で守る視力



日常で文字を読んだり、人の顔を見たりする時、私たちの視力の中心を担っているのが目の奥にある「黄斑」という部分です。カメラで例えると、ピントを合わせる最も大切な場所であり、眼科で測る視力もこの黄斑の見る力を測定しています。小さな場所ですが、ここが傷むと見え方に大きな影響を及ぼします。

黄斑の病気で最初に出やすいのが「ゆがんで見える」という症状です。障子や窓枠などの真っすぐな線が曲がる、文字が読みにくい、真ん中がぼやけるといった変化が現れます。疲れ目や老眼と勘違いされがちですが、老眼や眼精疲労だけで線が曲がることはありません。黄斑の病気が隠れている可能性があります。また、この病気はまず片目だけに起こることが多く、もう片方の目が無意識に補ってしまうため、異変に気付きにくいのも特徴です。

原因となる代表的な病気には、加齢に伴い黄斑に異常な血管ができる「加齢黄斑変性」や、糖尿病のある方では「糖尿病黄斑浮腫」や血管の詰まりによって起こる「網膜静脈閉塞症」、中央に穴が開く「黄斑円孔」などがあります。病名はさまざまですが、共通するのは「ゆがむ」「真ん中が見えにくい」という症状です。

現在は医療技術が進歩しており、注射療法や手術によって進行を抑えたり症状を改善したりできるようになりました。しかし、黄斑は一度傷むと完全に元に戻すことが難しいことが多いので、いかに早く治療を開始できるかが視力を守る鍵となります。患者さんから、「もっと早く受診すれば良かった」という言葉を聞くこともあります。

難しい病名を覚える必要はありません。覚えていただきたいのは「ゆがんだら眼科！」です。では、片目ずつ交互に紙面を見て、見え方をチェックしてみましょう。もし「片目だけゆがむ」「左右で見え方が違う」と感じたら、それは目からのSOSです。「もう少し様子を見よう」と放置せず、早めに眼科を受診しましょう。

（府医師会理事）